寒地スイカとCDU化成

～ 南津軽の生産地常盤村を訪ねて ～

河　見　泰　成

ホトトギスやカッコウの さえずりに明けた津軽平野

“うちのCDU化成を使うて，青森県南津軽一帯のスイカがようできたんや。”―と、チッソ旭化肥料の別府販売課長から話があったのは、昨年の9月頃だったろう。

“時期を過ぎたというけど、それでもええのや。写真もあるし、成績も揃うとる…。”ということだったが，ちょうどその頃は、予定を変更しにくい事情があって，“ほなら来年にしようか。？…。”ということになった。

その時から，優秀な寒地スイカへの期待もさることながら，そのときから筆者には別の期待があったのだ。そこ―常盤村農協には（スイカばかりでなく）農作物の栽培と販売の指導調整に，情熱のありったけをぶち込んでいる指導者がいることを知ったからだ。

こんな訳で，寒地スイカと云えば，もうそろそろ声がかかっても良さそうなものだと考えていると，或る日のこと，“ええとこえ来てくれたな。実は6月24日に木造町で生産農家の協議会があるのや。川端君と一緒に行ってみんか？”と別府さんに声をかけられた。

専務の鎌田さん

そこで，さっそく6月22日の夜，霖雨にけむる上野駅を発った。きらいな列車の寝台も，旅馴れた連れがいるという気やすさのせいか，サッパリした気分で目がさめた。車窓を東北の緑が流れ，ホトトギスやカッコウの囀えずりを耳にすることもあった。そして，みずみずしい冷涼な朝もやのかなたに，弘前の詩人―故福士幸次郎さんの心のふるさと「岩木山」が現われ，やがて消えて行った。

CDU化成と 常盤村のスイカとの縁（えにし）

弘前市から，今日（23日）訪ねる常盤村農協がある北常盤駅や，浪岡駅は指呼の間であるが，県経済連への挨拶を欠かす訳に行かないので，われわれは一路青森へ直行した。この間ほぼ40分。この間を利用して，筆者は川端さんからいろいろ話をきかせてもらった。

“42年の3月でした。常盤村農協の指導課長の佐々木武美さんという方から―スイカの栽培試験をやりたいのでCDU化成のサンプルとパンフレットを送ってくれという手紙が届きました。”

佐々木さんから手紙が来るまでには，次のような事情があったのだそうな。40年頃まで常盤村農協では，スイカ栽培に固型肥料を使っていたということから判るように，組合長の奈良岡さんをはじめ佐々木さんらは，「緩効性窒素肥料」の出現に大きな期待を寄せ，試みにA化成（緩効性）肥料とナタネ油粕を併用してスイカを栽培したのだが，結果は必ずしも良好とは云えなかったらしい。

指導課長の佐々木さん（うしろに見えるのはエッソ石油の事務所）

確かその頃（だったと記憶しているが―。）神奈川県園芸試験場三浦分場長の横溝剛先生が考えられた，いわゆる“三浦（栽培）方式”が全国野菜産地の注目をあび視察，見学者が三浦に参集したことがあった。

佐々木さんも恐らくその中の一人であったのかも知れない。そこで“神奈川県園試三浦分場長の横溝先生に，スイカ作りにはCDU化成がいいということを聞いたので……云々。”という前記の手紙が書かれたのだろう。

“実際問題として，寒地スイカの栽培にCDU化成を使うことは初めてなので，多少懸念がない訳ではありませんでした。しかし，それだけに，しっかりした試験をやりたいというこちらの考えと，常盤農協の熱意とが一体となって，CDU化成とナタネ油粕併用区など4つの試験区を設置して試験をしたところ，結果はやはり，CDU化成とナタネ油粕併用区がいちばん優秀な成果を挙げたという訳です。”

常盤農協では，現在別項のような施肥設計で，スイカ

の栽培を指導しているが，これは当時の試験結果を基礎に設定されたものであろう。

こういう経過で，43年には常盤村農協のスイカ栽培の施肥設計に，CDU化成が組み入れられるとともに，同年からは，隣接の浪岡農協などでも，同じような方針でスイカの栽培試験が行なわれることになった。

スイカ栽培施肥設計（常盤村農協）

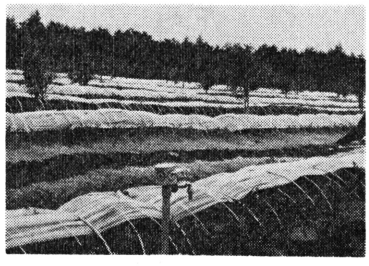
肥料名	全量	元肥	追肥
堆肥	1,200kg	1,200kg	kg
けいふん	60		60
ナタネ油粕	30	15	15
CDU複合燐加安S 555	40	40	
〃 S 682	50		50
米糠	60		60
BMようりん	20	20	
硫加	15	10	5
苦土石灰	80	80	

成分合計（kg）
N15.776　P15.668　K20.094

“この辺一常盤に15ha、浪岡に，50ha，屏風山（木造）にはザッと200haのスイカが栽培されて（今年はもっと増えるでしょう。）いますが，これらを対象として43年には相当まとまってCDU化成が入荷しております。”とは川端さんの話だが，今年はいずれも作付面積が平均50％も増えているので，CDU化成もそれに伴って増えることになろう。

約束の時間より約30分遅れて青森から北常盤駅に着いた。駅前通りとT字型に結ぶ道路を左折して約30mぐらい行った左側に，2階建の白亜の建物が見える。常盤村農協は，てっきりそれだろうと近づくと左にあらず，それはエッソ石油の事業所で，その反対側に，小柄な筆者の肩幅ぐらいはあるだろうと思われる門柱が建っていて，右側の柱に，筆ぶとに認められた“常盤村農業協同組合”という看板がかかっていた。これはまた何と郷愁をそそる，古風な，しかも何と農協らしい建物であろう。

山手へのびるスイカ畑



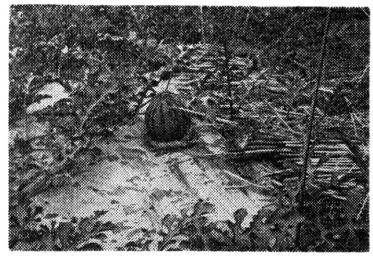
戦艦武蔵乗組みの1人
憂愁さがただよう佐々木さん

川端さんに続いて筆者が事務所に入ると，奥の方で“やあ，やあ…。”と元気な声がして，赤銅色に陽やけした，どことなく東京肥飼料検査所の佐賀さんに似かよった人物が“よう来いしたじゃ，まあ座われや”と声をかけてきた。指導課長の佐々木武美さんである。

今度の戦争のドタン場一沖縄本島における日本の攻防戦に，死力の限りをつくして奮戦中のわが将兵を救援し戦局の展開をはからんと，当時世界最大を誇る戦艦“大和”と武蔵の両艦が勇躍壮図に赴く途中，あえなく米航空機の襲撃を受け，南海の藻屑と化したことは，憶い返えすだに生々（なまなま）しい。

佐々木さんは，その戦艦武蔵の数少ない生き残り勇士のひとり。時おりフト面上に憂愁さがただようのは，苛烈だった戦争のかげりなのだろうか？。だが佐々さんは戦争のことに触れると，「アハハ…，我（わ）はその頃はホンの紅顔の美少年だったで…。”と笑って多くを語ろうとしない。

すくすくと育つスイカ



（さて，この辺から以下は，主として佐々木さんとの対話，ないし佐々木さんの話に取材したものである。だから，そのニュアンスを幾らかでも読者にお伝えするため，“それらしい文句”を用いたが，これは筆者の止むを得ざる方便であって，決して津軽の言葉ではない。現地ではじめて聞いた津軽弁は，筆者が若い頃，身辺で耳にしていたそれとは，だいぶ違うことを知った。）

天気も続くし，水もある
今年もまずスイカは貰らったなあ。

“このままでいぐと，川端さん，今年もまんず間違いなかっぺ。有難てえことに天気も続くし，水もある。ここ2週間ばかりが勝負ではなかべか？…。”精悍な顔がこう云って笑った。今年のスイカはまず“貰らった”というポーズである。佐々木さんの持ち味というのだろうか，この人がいるだけでカラッとしたムードがただようから徳な人である。

ちょうど大和農園技術部長の渡辺さんも加わって，話が一層賑やかにはずんでいるところえ，カーキ色の作業服に古びたハンティングを横っちょに冠った老人が入ってきた。

畑でみかけたCDU化成

“やあ暫らくです。”，“掛けなんしょ。”という言葉が交わされたが，誰も紹介するでもない筆者もその老人

の風姿から，てっきりスイカ生産者の一人だと思ったので，格別気にも止めずにいたが，なんと，これが常盤村農業協同組合の奈良岡組合長さんだった。と判ったが，後の祭。“でわ…。”と会釈して組合長さんは出て行ってしまった。という訳で，奈良岡さんの写真は撮りそこねてしまった。

さて，津軽を中心とする今年の青森県のスイカ作付面積は，昨年の豊作，米の生産調整に伴う転換気運などもあって，県下全体で1,000ha ないし，1,200ha と云われているなかにあって，この常盤村農協管内のスイカ生産はどういう地位を占めているのだろうか。次の2つの表を見て戴こう。

アルプスメロン（常盤村農協で）

今年の推定収量 1,000トンを10a 当りに換算すると3,330kg ということになるが，これは内輪の推定で，条件さえ整えば昨年以上の収量を挙げることは，必ずしも難事ではあるまい。

栽培の多い市町村の生産量（43年）

市町村名	作付面積	10a収量	収　量
木　造	214ha	2,600kg	5,570 ton
弘　前	59	1,900	1,120
浪　岡	50	3,900	1,950
鰺ケ沢	36	2,400	865
青　森	30	2,260	678
黒　石	22	1,490	328
常　盤	20	3,800	760
平　賀	20	1,460	292
岩　木	20	1,330	265
金　木	14	1,940	271
新　郷	13	1,480	192

なお，この表で気がつくことは，10a 当り収量において浪岡と常盤村管内とが，目立って多いことである。3,900kg，3,800kgという単位面積は，同じ43年度のうち千葉県の5,350kgは別として，愛知2,960kg，茨城3,609kg，熊本3,460kg，静岡2,850kg，新潟3,000kg，神奈川3,300kg のいずれよりも多い。ということは何を物語っているのだろう。

常盤村のスイカ収量

年 次	作付面積	10a収量	収　量
41年	ha	kg	363 トン
42			866
43	20	3,800	760
44	15	4,300	640
45	30	3,330*	1,000 *

<註> * 推定

米どころは米さえ作っていればいいという訳のものではない。さりとて他の作物に手をつけるとしても，田植えと秋の収穫時の作業をと労力どう調整すべきか。この点が解決されなければ，仮にスイカ栽培に手をつけるとしても，事実上不可能に近かったのだが，この解決の糸口となったのが除草剤の開発だ。

津軽地方でスイカ栽培に先鞭をつけたのは恐らく屏風山スイカと云われる木造町あたりらしいが，やはり除草剤の開発によって，水稲栽培の労力配分のバランス調整が可能になったことが，スイカ栽培に手をつけた動機になっているようだ。

“おら方でスイカに手つけたのは，今から14,5年前だども，経営の合理化，複合化のためスイカ作りが得だと云うて，大体この辺の田んぼからは米さ12,3俵はとれべえ。んだはんで，米の代りにスイカを作るからは，米以上の実入りがなければ誰もやる気さ起らねえす。”—と，佐々木さん。

これは当然の話。

ところで，今でこそ青森はおろか北海道でさえ立派に寒地スイカが栽培されているが（ときには17kg，糖度12C° タップリというような大物さえ生産される。）その頃は，スイカと云えば「暖地スイカ」によって市場が占有されていた。

そういう市場へ割り込もうというのだから，並み大抵の努力や苦労では，優秀な品質のスイカを生産するのはおろか，第一，市場に顔を売ることさえ不可能に近い。

そこで，将来の果実を期待するには，栽培，指導，市場との折衝など一切を，農協が一貫して当る，常盤農協方式ともいうべきものを打ち出した。生産指導なども，種子の選定から，栽培に至るまで，農協が試験をしてみて，良いという結果を待って実施に移す。単位当り収量がすぐれている秘密も，どうやらこの辺にあるらしい。

ナスと花寺（帯盤村農協で）

こういう方法は非常にスローモーションのようであるが，栽培技術の高度平準化につながるものとして注目したい。

“うちの組合長奈良岡さんは，もと県農試の化学部におられた方，或は堅いという批判もあろうが，飽くまで信念の人として，今日まで初心を通して来られたす。”

“今でこそ，押しも押されぬ「常盤スイカ」だども，10年前の32，33年頃，県内市場はもとより東京市場などへ売込むときは，全く弱った弱った。何んぼ現物見せて

も，てんで相手にしてくれねえす。全く閉口たれたなあ，あの頃は…。んだども，石の上にも3年の諺（ことわざ）のとおり，1年経ち2年過ぎ，3年目頃からようやく「常盤スイカ」の良さを認めてくれたす。”

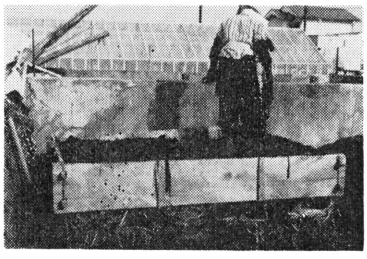
“何？糖度は何んぼあるかって？もちろん糖度計はある。んだども，生育期に連続して好天に恵まれるおら方のスイカは，成育時に好天に恵まれる関係で日中と夜間の温度較差のバランスがとれ，果肉はほどよく色づいて，糖度計で計る必要がねえほどの玉になる。それにしても川端さん”と，佐々木さんは急に話題を変えて“それにしても，チッソ旭の「CDU化成」という肥料は，現時点では本当に良い肥料だと思うなあ。”と云った。

スイカ，スイカ，スイカ……

美事に展開する山手のスイカ畑

米の生産が限界に来ており，農業は次第に拡大生産の方向へ進む以外に，合理化の道はないだろうと思われるとすると，当面手をつけるとすれば，「山手」の畑地ということで，スイカは次第に山を登る。

床土づくり（常盤村農協で）



そこでわれわれは，農協の鎌田専務の運転する車で，山手にあるスイカのモデルプラントを視察することができた。これは行政区域としては浪岡管内に属するのだそうであるが，都合で常盤村農協が栽培試験をしているということであった。

カメラを向けたのは，ごく1部に過ぎないのでお判りになるまいが，近い将来，この辺一帯に有望なスイカの広域生産団地が出現する。見渡す限りの斜面という斜面が，すべてこれスイカ畑である。この畑を見ているだけで，生産農家のたくましい生息（いぶき）が，そくそくと迫って来るようだ。

“川端さん，何んぼ宣伝料くれるかな？”と，佐々木さんは畑の一隅を指した。そこには使用中の「CDU複合燐加安が」4袋ほど置いてあった。

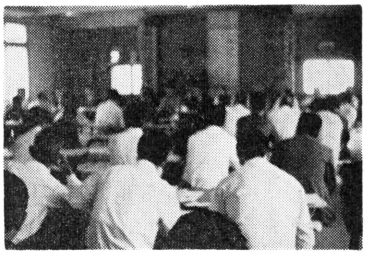
“こんな良い宣伝材料はなかっぺ”

佐々木さんは豪快に笑いとばした。

山手のスイカ畑から帰ってから，われわれは，集荷場の裏手にある農協の圃場と，3棟ほどのガラス室などを見学した。

花卉，ナス，アルプスメロン或はピーマン，チシヤなどが，綺麗に（というのは，ゴミゴミせずに）栽培されていた。圃場は試験のためでもあり，また管内の生産農家に対する展示の役目を持つものであるからだ

津軽地区野菜生産者協議会（24日）



管内のこうした指導に打ち込む傍ら，この精悍で健康な指導課長さんは，閑暇（ひま）をみては，スイカの栽培技術の指導に，そしてまた他県の優秀な技術を吸収するために，ここと思えばまたあちら，まるで牛若丸のように飛び歩るいて倦（う）むことを知らないのだ。

翌24日，木造町で開かれた津軽地区の野菜生産者協議会第3回総会が開かれて，奈良岡組合長がこの協議会の会長に再選された。書記長役を承る佐々木さんは，①各地作付面積の把握，②各地生育状況巡回視察，③販売方法と販売先の検討，④各種試験調査発表および検討など今年の事業計画の進推のため，“わいは…どうすべっちゃ”と云いながら，顔つきは満ざらでもなさそうに，あちこち飛び廻っていることだろう。

あとがき

梅雨どきと云えば，鬱とうしいのは当然ですが，ことしの梅雨は鬱とうしいのを通り越して，何となく狂っているような感じがしました。

東北東へ進むと予想されていた台風2号が紀伊半島へ上陸しはたの良いとして，急に進路を北面から西方へ転じて西進，更に対馬から九州へ出て来るという迷走ぶり。長期予報通りだと云えばそれまでですが，これは戴けません。それにしても8月にはまた台風がやって来るとか，一雨欲しいところには，いつまでたっても降りもせず，もう降らんでくれと悲鳴をあげている地域には，遠慮会釈なく豪雨が襲いかかる。

編集子にも，この頃の天候の動向には少なからず気がかりです。

天候ばかりでなく，いろいろと問題が多い折柄ですが，どうかお元気にお過し下さるようお願い致します。